

□ 器楽（室内楽を含む）

渡 辺 和

2月26日の安倍総理のイベント自粛要請を発端に、ベートーヴェンで埋め尽くされる筈だった2020年の音楽界は未曾有の混乱に見舞われた。当稿では、安倍要請から緊急事態宣言までを混乱期、4月2週から6月2週をロックダウン期、以降年末までを再開期とし、ベートーヴェン演奏を軸に時系列で概観する。なお、正確な情報把握が困難故、ロックダウン期に音楽伝達の中心を担ったSNSでの演奏は最小限の言述に止める。

◆楽聖記念年の始まり

まず、年頭から混乱期に至るまでのプレ・コロナの2ヶ月に触れておこう。新年4日から横浜幸雄が埼玉芸術劇場の若手を従えた室内楽ガラでベートーヴェン記念年を開幕、10日には仲道郁代がモダンとオリジナルのピアノで楽聖作品を弾き分ける（東京芸術劇場）。1月26日には、鈴木理恵子と若林顕がヴァイオリン・ソナタ（相模湖交流センター）、28日には宮田大と田村響がチェロ・ソナタ（浜倉宮朝日ホール）と、共に全曲演奏の第1回をスタート、国内中堅が順調に先鞭を切った。

外来奏者としては、コロナ騒動が始まった横浜港を臨む神奈川県民ホールが、芸術監督一柳慧がフラックス弦楽四重奏団をアメリカから招聘。新作初演から公開リハーサル、一柳作品全曲演奏まで含めた大規模な現代音楽祭を開催、2020年で最大規模の室内楽イベントとなる。1月19日には初夏に予定の台湾フィル団員がハクジュホールで室内楽を披露、五輪関連では唯一の室内楽公演だった。

2月に入ると、22日にサントリー大ホールでのアンネ・ゾフィー・ムターがダニエル・ミュラー・シュットらと《ハーブ》などの弦楽四重奏を披露。24日には、ムターとオーキス（サントリー）、諏訪内晶子とアンゲリッシュ（東京オペラシティ）と、東京の大ホールで同時に二人の国際的スターがベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ撰集を披露する、巨大音楽消費地でしかあり得ない珍事も。なお、この日を最後に、著名スターの大ホールでの楽聖作品のみ二重奏は年内には記録されない。オーケストラアンサンブル金沢首席を務めたカンタがエリアン・リムとチェロ・ソナタ全曲を金沢（16日）とよみうり大手町ホール（18日）で演奏、このジャンルでは年内国内唯一の外国人奏者のみに拠る全曲演奏となる。安倍要請直前に公演最終日を終えたベネヴィッツ弦楽四重奏団がこの年最後の外来室内楽団ライブになるなど、まだ誰も想像していなかった。

◆混乱期からロックダウン期

安倍要請直後の3月初旬、大阪京橋のライヴハウスで国内初のクラスターが発生。今世紀に入り器楽室内楽の重要な拠点となっている小規模コンサートスペースは、早々と活動停止に追い込まれる。オーケストラやオペラも通常の公演を中止、無観客ライブ配信が試みられる。自前の練習場を有する日本センチュリー響や神奈川フィルは練習場からネットで団員の室内楽を配信、Web活用の嚆矢となった。

2月後半から都内で予定したアウトリーチ活動を一件を除き中止していた東京・春・音楽祭は、3月14日からの本公演の殆どを配信化、ライブはわずか9公演となる。その中に、明日を背負う白井圭・門脇大樹・津田裕也に拠るベートーヴェンのピアノ三重奏全曲演奏（旧奏楽堂、3月19、20、21日）が含まれ

たのは幸運だった。

4月初旬から5月末まで、全てのライブ活動が停止。ゴールデンウィーク風物詩だった有楽町ラ・フォル・ジュルネ、びわ湖クラシック音楽祭、いしかわ・金沢森と緑の楽都音楽祭らは中止。連休明けに予定され、ベートーヴェン記念年に対応した課題曲を並べた第10回大阪国際室内楽コンクール&フェスタも一年開催延期となる。

◆再開期

6月半ばから大ホールが手探りで再開するも、会場が三密必至の室内楽は慎重だった。初夏から夏までのライブ活動で目立ったのは、ロックダウン中に積極的に個人配信を行った若い奏者の動きである。巣籠もり中に打楽器教則本として知られるシローネ《Portraits in Rhythm》全50曲を50日かけ連日Webにアップし完奏した曾田瑞樹は、6月21日に原宿カーサモータルで全曲をライブで再現、限られた数の聴衆を驚嘆させた。

7月1日には、札幌での再開第一段としてカルテット・エクセルシオが札幌定期を開催（キタラ小ホール）、「病から癒えた神への感謝」を含むベートーヴェン作品132を披露する。8月に入ると、リモート合奏や配信に積極的に取り組んだ尾池亜美率いるアミティ・カルテットが16日にベートーヴェン作品131を含むリサイタル（JTアートホール）。Yamato弦楽四重奏団が春から予定されていたベートーヴェン中後期作品を網羅する4回のチクルスを、聴衆を半数に限る状況に対応すべく8月5、12、20日及び9月6日に昼夜2公演で敢行（神奈川県立音楽堂）、コロナ明けの記念年のスタートを感じさせた。

霧島や草津など夏の室内楽セミナーや音楽祭が休止になる中、小澤室内楽アカデミー奥志賀は8月下旬にオンラインで在欧講師がレッスン、Web配信非公開の結果発表会も行う。また、打楽器奏者加藤訓子が2020年開催を目標に続けたクセナキス「ブレイアデス」を18名の若手打楽器奏者で演奏する企画は、8月に東京国立の市民芸術小ホールでサマーキャンプ型セッションを行い、一部の演奏が野外で市民に公開された。

9月に入ると、13日から19日に御堂筋を中心に「大阪クラシック2020」がオンラインとのハイブリッドで開催。市内各所で開催される仙台の「せんくら」は中止となるも、「クラシックエール仙台」として会場を限定。10月3、4日にベートーヴェンをテーマに若手中心で15公演を行い、うち器楽室内楽が13公演を占めた（青年文化センター）。

10月になり、「入国後2週間の隔離」を受け入れた在欧演奏家の帰国公演が再開する。メンバーのひとりがドイツ人のため四重奏としての帰国を断念したドイツ在住のロータス弦楽四重奏団は、日本人奏者3名が入国し隔離を経、ベートーヴェンの弦楽三重奏を中心とする演目で全国公演を行う。11月には同様のプロセスを踏みベルリン在住の葵トリオが帰国、四国や北陸を含む全国ツアーを成功させた。なお、年末までに二週間隔離を経て来日ツアーを行った外国人演奏家は、12月23日のサントリー大ホールなどで庄司紗矢香との二重奏を披露したヴィンゲル・オラフソンのみである。

12月に入ると、16日のベートーヴェン誕生日前後には各地でそれなりの数の演奏会が行われた。徳永二男と山口裕之という元NHK響コンサートマスターが、前者は25、26日に仲道郁代との二重奏でヴァイオリン・ソナタ全曲（東京文化会館）、後者は23、24、25日に第1ヴァイオリンを務めるさくら弦楽四重奏団で作品127から135までの後期弦楽四重奏連続演奏（ティアラこうとう小ホール）を敢行。スター外国人に頼らず記念年を終えた日本室内楽界の地力を示した。